



明治維新150年特集

五卿と内山の射撃場

宇智山村にて発砲場所でき、下宿の輩ともからのおの行き向いて見物かたがた装条銃じゅう十五発これを発す、七十間(約120m)ばかりなり。

慶応3(1867)年5月27日、五卿の一人、東久世通禧ひがしきよとみが日記に残した内山村の記録です。この日、五卿と従者が内山で射撃訓練を行います。使用した銃は「装条銃」と呼ばれる西洋式ライフル銃です。当時、内山は薩摩藩や五卿が射撃訓練を行う場所でした。

内山における射撃についての最も古い記録は、慶応2年4月24日、薩摩藩が小銃の試し撃ちを行ったというものです。当時、薩摩藩は幕府による五卿の強制送還を危惧しており、太宰府に滞在する幕吏を威圧する目的があつたようです。連日、北谷辺りで大砲・小銃の射撃訓練を行い、その音はこの地域に轟とどろいたといひます。

五卿も銃や射撃訓練には多大な

関心を寄せていたようです。6月18日には薩摩藩士大山格之助(綱良)つなよしから「六連銃」(回転式拳銃か)を受け取っています。また、7月3日に実施された薩摩藩の大砲射撃には、大山の誘いのもと東久世が「内々に」内山へ行き、これを見学しています。さらに、11月にも五卿が薩摩藩の内山における射撃訓練を見学したことが、資料より確認できます。

慶応3年に入ると、五卿は従者より、幕府が新將軍徳川慶喜のもとで兵制をことごとく西洋式に変革し、訓練に励んでいるという報告を受けます。これが後の訓練規則の改革に



影響したのかもしれませんが。4月21日には、五卿は長州藩より装条銃30丁と弾薬3000発を500両で購入し、同月23日に従者らに支給しました。また、五卿は毛利家より「元込騎馬銃」(後装式で短銃身の銃)5挺を進呈され、翌月12日に東久世が内山で試射を行っています。こうした中、冒頭で述べた射撃場が新たに完成し、射撃訓練を行う環境が整備され、従者も参加しました。

8月6日に五卿の主座三条実美さんじようざねとみは従者一同を集め、国難の時節につき国家のため文武の稽古に励むよう命じるとともに、日々の稽古の課程を言い渡します。その中には2と7が付く日に射撃訓練を行うことが盛り込まれていました。実際に射撃を行った記録を見てみると、4月に銃を購入して以降、内山で計36回射撃訓練を行っています。特に9月は最も多い7回を数え、2と7が付く日以外にも訓練を行っている日が見られます。

このように内山は、当初薩摩藩が射撃訓練を行う場所でしたが、のちに五卿と従者が射撃を行う場所となりました。慶応3年12月19日に太宰府を発つまで、五卿は新しい時代の到来を期待しつつ、射撃訓練に励んでいたであらう姿が想像できます。

公文書館 篠崎 将貴

「明治維新150年特集」は今回で終了です。「愛読ありがとうございます」